

緊急インタビュー

「ウッドショック」どう乗り越えるのか?

中国木材(株)

堀川智子 社長



堀川智子社長

今年に入ってから外国産材を中心に木材価格の高騰が続いている。弊紙読者からは今回の「ウッドショック」について、「何が起きているのか」、「いつまで続くのか」といった切実な問い合わせが相次いで寄せられている状況だ。こうした中、弊紙は国内製材企業最大手である中国木材(株)の堀川智子社長に現在の木材価格高騰の背景や環境、今後の供給の見通しについて伺った。

――最初に高騰している木材市場の動きについて、解説をお願いします。

前提として日本は木材の自給率が37%程度で、残りの63%を外材に依存しています。木材は国際商品のため、原油や食物と同じように購買力のあるところに動きます。現在、米国の住宅市場が活性化し、2×4材が高騰したことで、従来日本に来ていた欧州材がそちらに向かうという事象が現実起きています。

そもそも米国でなぜ木材価格が高騰しているのかといいますと、①低金利によって非常に住宅が購入しやすく、着工が好調、②一方、製材企業は労働者がコロナに感染したり、給付金がもたえるため、製材量をなかなか増やせない、③米国の木材自給率は86%で隣国カナダからも調達していますが、そのカナダも温暖化の影響で害虫が越冬し、山の供給力が落ちている、④

「木材の適材適所」が今後求めらるる

米マツの産地で大規模な山火事が発生した――ことなど、複雑な事柄が絡みあって、木材の需給バランスが崩れ、米国では投機の対象である木材に高値が付き続け、材種によっては昨年の底値と比べて約3倍近くに高騰しました。

また、これまで欧州の集成材は大変安く日本に入ってきていたが、その理由の一つとして、コンテナの運賃が安かったことが挙げられます。以前は日本や中国が家電などをヨーロッパに輸出する際、帰りのコンテナでは積むものがないため、「安くてもいいからなんでも運びますよ」という状況でした。一番安い時には、広島県から関西に運ぶトラック運賃と同じ値段でヨーロッパから船便が到着できました。その後、コンテナ運賃は値上がりしましたが、それでも広島県から東京都まで運ぶトラック運賃と同じ値段でヨーロッパから木材が届くという時代がしばらく続いていた。

そのコンテナを巡る状況も昨年のコロナウイルスによる感染拡大前後から大きく変わりました。海上コンテナは耐用年数が5年程度とされていますので世界で稼働している海上コンテナの5分の1は毎年作り続ける必要がありますが、米中貿易摩擦に伴う荷動きの低下から、コンテナの製造量がこの2年で減少し、数も不足しています。コンテナの向かう先も変わり、欧州から日本へのコンテナも大幅に値上がりしました。こうした流れが木材の高騰や物が入ってこない現状を招いた要因の一つといえます。

実際に、昨年9月に出港したコンテナがまだ日本に着いていないというお客様の企業があります。また、米国から東京を経由して上海に行く船が、東京をスキップしてしまうということ事態も発生しています。そのため、上海で日本国内向けの木材が置き去りにされているケースもあります。この様に乱れていた海運物流に、さらにスエズ運河の事故が起きました。一度そういう滞留がおきてしまうと、元に戻るには時間がかかります。

――我が国の着工戸数が昨年と同様と仮定した場合、御社の見通しはいかがですか?

昨年、弊社は、コロナ禍における住宅着工の低下を予測し、一旦減産していたのですが、思った以上に着工戸数が回復したため、8月には増産体制に戻しました。弊社は木造軸組み住宅の供給において、25% (横架材36%、柱14%、羽柄材18%) のシェアを頂いておりますので、木材が無くて家が建てられないといった状況はなんとか防ぎたい、増産体制としていますが、それでも、昨年後半からはずっと販売に生産が追いつかない状況で苦慮してきました。そこに年明けからの「ウッドショック」ですので、弊社も供給余力がないのが現状です。

当初、今年の秋ぐらいになれば少しは事態が落ち着くかと思っていたのですが、寄せられる報告から、年内はずっと供給が少ない状況が続くのではないかと、見方が変わりました。柱材において弊社が量産しているのは杉集成材ですが、柱は欧州材であるホワイトウッドが多く、シェアを占めます。欧州材の遅延や米国に木材が向かっている現状が続けば、場合によっては、6月になると柱が足りなくなり、住宅が建てられなくなるのでは、と危惧しています。

――外材と国産材の違いはどのような点でしょうか。また、国産材の今後の見通しについて教えてください。

米マツがメジャーになったのは横架材として重要な、たわみ強度が高いからです。特に梁には人や家財道具の重さに耐えられる強度が求められますが、その強度から、一時期は「米マツ材がないと住宅が建たない」と言われていたくらいです。それに対して、国産材の杉は、たわみ強度で比較すると低いです。これも梁成を太くすれば使えるし、小屋組みを軽く仕上げることも可能です。そもそも木材は繊維方向に強い素材ですので、柱など縦に使用するには最適

ればよいでしょうか?

まず特長ある家作りが生き残りの一つの道だと思えます。ある広島県の工務店さんは、国産材を随所に見せる様に使ってお客様のニーズを掴み、業績を伸ばしています。お施主様、一般の方は杉、桧にいいイメージをお持ちなので、PR次第で、お客様の心をつかむ方法があると思えます。木材の使い方は工務店さんの知識に敵わないと思います。構造としての強度、快適性、耐久性、デザイン性から、国産材を使った魅力的な木造住宅が沢山出てきたというのが率直な印象です。互いの良い使い方を取り入れて、日本の木造住宅をさらに発展させていければと思います。弊社としては、皆さんから御意見を伺って、新しい商品を開発し、お役に立てたら幸いです。

――弊社読者工務店についてメッセージをお願いします。

御存知の通り木材は樹種別に特性が異なります。その特性を踏まえた上での住宅の設計が必要になると考えております。国産材においては、森林蓄積の多い杉を使って如何に高性能な家を建てるかということが重要だと思えます。特に杉は軽く断熱性にも優れます。節の見せ方など、工務店の方の技術に期待しています。



同社敷地内にストックされた木材。これだけの量の木材でも10日あれば全てなくなると話す。